

「日用品メーカーのロジスティクス EDIの取組み」について

メーカー7社とプラネットで構成するロジスティクスEDI推進会議では、物流事業者などが参加する流通経済研究所のサプライチェーン物流生産性研究会と共同でロジスティクスEDI構想を推進しています。すでに一部の企業で運用が始まっており、今回はそれを踏まえた効率化の実験結果についてお伝えします。

段階を追って、物流業務効率化を目指す

ロジスティクスEDI構想を簡単に言うと、物流データを可視化し、活用することで、様々な物流課題解決の実現を目指す取り組みです。そのキーとなるのがメーカーの出荷予定データ(ASN)です。ASNはできるだけ多くの場面で活用することで、様々な効果が期待できます。ロジスティクスEDIは段階を追ってスタンダード(初期)、プレミアム(中期)、プラチナ(後期)という3つの形で進化させていきたいと考えており、初期段階のスタンダードでは、メーカーから卸売業に対して事前にASNを送り、それを活用した荷受作業の効率化を目指します。実際に物流現場で行った実験は次の通りです。

入庫側4割、出庫側3割の時間削減に

まずメーカーは、卸売業から商品の注文を受けると、注文データからASNを作成し、卸売業に送信します。今回の実験では車両別ではなく、当日配送するSKU別のASNを使用しました。

入庫側の卸売業ではトラックが到着すると、納品された商品のITFコードを読み込み、事前に送られたASNの情報と照合します。従来は発注番号が異なっても未検収の同じ品名の商品が端末に複数表示されるため、その商品がどの発注分かを照合するのに時間がかかっていました。実験では、ASN情報との照合時にその日届く発注番号だけが呼びだされるため、伝票と一つ一つ突き合わせてチェックするという作業がなくなりま

す。その結果、SKUあたり約4割の時間短縮になるという結果が得られました。また、バースに荷物が滞留する時間が短くなることから、ドライバーの待ち時間も減ると考えられます。ASNには賞味期限も含まれているため、荷受時に賞味期限を手入力していた場合はその作業がなくなり、入力ミスやその修正に費やす時間も減らせます。

出庫側のメーカーでは、納品伝票の発行や入庫側で押印した伝票を保管するという業務に大きな負荷がかかっていました。実験ではASNの活用によって伝票をなくすことで、1日あたり

の作業時間を約3割削減することができました。

SDGsや物流業界の課題解決に寄与

ロジスティクスEDIは、ロジスティクスEDI推進会議のメンバーと準備が整った一部の卸売業との間で、すでに運用が始まっています。まだ一部の拠点に限られています。そこから上がってきた課題として、ASNに対応しているメーカーと未対応のメーカーが混在している状態だと、想定したほどの効率化が図れないという声がありました。

メーカー、卸売業のいずれも、対応する企業が増えれば増えるほど大きな効果が得られます。また、この取り組みが業界全体に広がることで業務の標準化につながり、SDGsや物流業界の課題解決に寄与します。ぜひ多くのメーカー、卸売業の皆様にご参加いただけるようお願い申し上げます。



ライオン株式会社
サブライチェーン企画本部長
南川 圭氏
執行役員

もっと知りたい
ロジスティクスEDI Vol.1

出荷予定データ(ASN)についてはこちらをご覧ください